

## 観光地としての筑波山地域の変遷と今後 －観光ガイドの分析から－

谷田 幸隆

筑波山地域は古くから現在に至るまで多くの人を訪れている。他の全国の山と比較しても歴史が古く「万葉集」などに多く詠まれていることから、和歌等の文学研究が豊富である。さらに最近ではジオパークとして認定されるなど地質学的な研究も行われている。だが、観光地としての筑波山にスポットを当てた研究は少ないのが現状である。

本研究では、江戸時代以降に発行された観光ガイド、観光マップの分析を通して筑波山が観光地としてどのような変遷をたどってきたかを明らかにするとともに、そのような変遷を踏まえた上で今後観光地としてどのように発展していくべきか、どのようなガイドが有用かについて考察と提案を行った。

筑波山の観光については「信仰の山から観光の山へ」と言うことができる。筑波山は江戸時代に徳川の祈願所となったことで全盛期を迎え、体系的なガイドも作成され多くの観光客が訪れた。明治期には廃仏毀釈の影響で観光客が減少したが、それを受けてか自然や名産品等を記載したガイドが増え、様々な楽しみ方ができるよう工夫がなされた。その後鉄道やケーブルカーの敷設でアクセス方法も記載するようになり、現在の総合的なガイドへと変化した。こうした変遷がある。

現在、筑波山は自動車やバス、ケーブルカー、ロープウェイ等を利用することで日帰りでも楽しめる観光地となっている。しかし、一つ一つの史跡をじっくり見て回るような観光はされていないのが現状である。また、筑波山を訪れる観光客数は減少傾向にあり、対策が必要であると考えられる。

変遷の調査と筑波山観光の現状から、現代においては過去のガイドに記載されている史跡ごとの詳細な背景や筑波山地域の特徴を利用したガイド作成が提案できる。今回はその中でも江戸時代刊行の「筑波山名跡誌」をベースとした観光ガイドを電子端末で利用できる形で試作した。

今後多くの観光客が訪れるために、筑波山地域やつくば市は今まで通りの観光を続けるだけでなく、新たな付加価値を生み出していく必要がある。

(指導教員 綿抜豊昭)